



Title	「実践英語e-learning」：試行（錯誤）の2年間、そして今後の展望
Author(s)	森, 祐司; 小口, 一郎; 山田, 雄三
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2012, 13, p. 63-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70340
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「実践英語 e-learning」 —試行（錯誤）の2年間、そして今後の展望—

森 祐司（大阪大学 全学教育推進機構 企画開発部 言語教育部門）

小口 一郎（大阪大学 大学院言語文化研究科 言語文化専攻）

山田 雄三（大阪大学 大学院言語文化研究科 言語文化専攻）

1. e-learning と英語カリキュラム

近年の ICT のめざましい発展によって、外国語教育においてもコンピュータベースの教育方法が可能となり、すでに多くの大学で試みられている。大阪大学ではサイバーメディアセンターのマルチメディア言語教育研究部門が主導し、全国の大学に先駆けでの大規模 CALL システムの導入、LMS の開発と運用、多言語教育システムの開発など、先進的な取り組みを行ってきた。

一方他大学に目を転じると、北海道大学では必修英語の半期 1 単位分を、自律学習型の e-learning で履修するカリキュラムを導入し、このための教材コンテンツとラーニングシステムを自前で開発している。九州大学は TOEIC 対応教材を使った自律学習オンライン授業を、やはり必修科目として設定している。名古屋大学では、授業外課題としてオンライン教材の学習を義務づけ、規定された分量の学習をこなさなかった者には授業の単位を与えないとする方針をとっている。このようにオンライン学習をカリキュラム内に導入するやり方は、今後もさまざまな形で多くの大学で活用されていくことだろう。

大阪大学は上述のように外国語教育における e-learning を先導する立場にあったが、こと英語教育カリキュラムへの e-learning の位置づけに関しては保守的なスタンスをとってきた。それには相当の理由があり、一概に「遅れをとった」と見るべきではない。しかし 21 世紀もすでに 12 年が経過し、学生が digital-native となった現在、オンライン教育をカリキュラムに位置づける試みはより積極的になされてもよいと思われる。ここで紹介する「実践英語 e-learning」は、このような状況を見据え 2010 年度に試行を開始した e-learning 型の授業であり、大阪

大学初の、カリキュラム内に明確に規定された自律学習中心の英語授業である。

2. 「実践英語 e-learning」

この授業では、自律学習用の e-learning 学習コースウェアを、従来よりも大きなサイズ（70 名）のクラスで使用し、英語授業の新しい可能性を探るものである。2 年次生を対象に、文系学生向け授業、理系学生向け授業を、それぞれ前期に 1 コマずつ、計 2 コマ開講している他、2012 年度には同形式の夏季集中授業を 2 コマ開講する予定を立てている。

授業の趣旨は、学生が自分自身のコンピュータや、オープン使用できる大学内の CALL 端末で、主体的・自律的に学習することである。基本的にオンライン学習課題を決められた時期までに自習することで、授業は成立する。これに加え 3～4 週に一回の割合で、習熟度テストと学習指導を対面授業によって行い、学期末には期末試験を実施する。

教材は、文系クラスが TOEFL や TOEIC 形式の問題演習を中心としたオンライン教材（「u-CAT」、 「LincEnglish」）を用い、理系クラスでは、アカデミック・イングリッシュを扱う「Listen to Me!」を使用した。以下は「LincEnglish」を使用した文系クラス（2012 年度）の授業スケジュールである。教室授業（小テスト）を 1 週実施すると、次の 3 週間は自習期間となり、合計で授業を 6 回、自習を 8 週の授業計画となった。（15 週目は予備日。）

Week	自習／教室	学習課題等
1	教室	ガイダンス、システム登録、TOEFL模試1 (Listening)
2	自習	Lesson 1
3	自習	Lesson 2
4	自習	Lesson 3
5	教室	小テスト: Lessons 1-3
6	自習	Lesson 4
7	自習	Lesson 5
8	自習	Lesson 6
9	教室	小テスト: Lessons 4-6
10	自習	Lesson 7
11	自習	Lesson 8
12	自習	Lesson 9
13	教室	小テスト: Lessons 7-9
14	自習	Lesson 10
15	自習	Lesson 11
16	自習	Lesson 12
17	教室	小テスト: Lessons 10-12
18	教室	TOEFL模試2(Listening)

6 回の授業に出席することが受講の前提だが、交通機関の乱れや忌引など、やむを得ない事情による欠席を想定し、各授業日には予備日を設けて対応している。70 名の受講登録者のうち、順調に出席し小テストを受ける学生は 60 名強であり、脱落率は約 1 割。これは通常の授業よりもやや高いかもしれない。

3. 学習サポート

学習ポートフォリオ（「学習自己診断シート」）の提出を課し、それに対する教員からのフィードバックを行う他、email による学習相談も実施した。また自律学習ではどうしても勉強を怠る学生が出てくるが、2～3 週間ごとに進捗を LMS 上でチェックし、学習状況の思わしくない者には TA から警告の email を出し、学習の促しを行っている。

email による質問や学習相談は学期初めの 4 月から 5 月に集中する傾向がある。教材内容や、語法・文法についての質問が多いが、中には TOEFL や TOEIC などの勉強法について聞いてくる場合もあった。学生からの質問はていねいに回答したうえで、全員で共有する価値のあるものについては WebCT の掲示板機能を利用して、以下のようにクラス全体に示し、学習の参考とさせた。

Subject: Lesson2のIncomplete Sentenceの10問目について。
Author: Koguchi Ichirou

Topic: 質問掲示板
Date: 2012 5 31 22:50

10) A new theory is being considered by the _____ team. The theory will be discussed at the next board meeting. (選択肢: researched, researching, research, researches)

答えはby the research team なのですが、by the researching teamではないのでしょうか？文法的には問題ないと思われます。

Comments
Forward

Comments
1 Author: Koguchi Ichirou
Date: 2012 5 31 22:51

回答
文法的には確かにどちらの選択肢も可能です。ここでresearchのみを正解にしているのは、native speakerにとって自然な語感になるもの、という条件で考えているからです。

文法の観点から言えば、researchingという現在分詞の形容詞的用法（「研究する」）が、名詞teamと共に起るほうが論理的に受け入れ易く、感覚的にしっくりくる場合もあります。researchingを選ぶのは無理のないところでしょう。

しかし「研究・調査」＋「名詞」のフレーズは、researchを使うほうがネイティブにとっては自然に聞こえるのです。例えばgoogle検索をしてみれば、researching teamよりもresearch teamのほうが、千倍近い数の例文がヒットすることがわかるでしょう。およそ14,900,000 vs 21,100となっていました。

阪大の学生は基本的に優秀であり、自己規律に富み、日本の大学の中でも自律オンライン学習を実施するのにもっとも適した対象に入るであろう。しかしそれでも 5～6 週目あたりから学習状況は顕著に低下する。以下は 5 週目の学習状況表だが、数字の入っていない部分が学習未完了を示している。該当の学生には一人ひとり email で警告を出した。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70

4. 成果

これまでの経験では、同一の教材を「実践英語 e-learning」のような大人数の自律学習型授業で使用した場合と、40 名程度の出席型の通常授業で使った場合では、学習効果の差はほとんどないか、通常

授業がわずかに勝る程度であった。また e-learning 授業に費やす学習時間は、週に 1～2.5 時間の場合が最も多く、この点でも通常の英語授業にはさほど劣らない。詳細は本稿の著者が著した報告書をご参照いただきたいが (www.cep.osaka-u.ac.jp/ourwork/progdevelproj/pastreports)、効果のあり方を十分に考慮したうえで、この種の授業を語学カリキュラムの中に位置づけていくことが、今後重要な課題となってくるであろう。

アンケートによると、受講生による授業評価は相当肯定的なものであった。出席を要せず楽ができるという点を割り引いても、学生はこの種の授業形態を新鮮と感じ、規則的な学習習慣を身につけ、独力で考える力を養うのに役立つものと建設的にとらえているようである。

5. 今後の展望

このように自律型の e-learning をカリキュラム内に組み込むことは、学習効果という点において、そして教育リソースの効果的な利用という点からも一定の意義があると言えるだろう。2012 年度は夏季集中授業という形で、8 月 2 週目から 4 週目にかけてさらに 2 コマ開講する予定である。「実践英語 e-learning」の今後の展開は、この夏季集中の結果も見ながら慎重に検討していくことになる。